

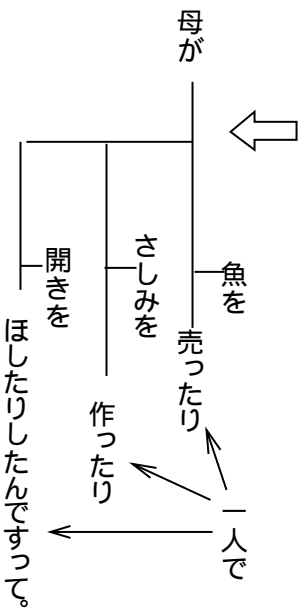
10 しかたがないので、母が一人で魚を売ったり、さしみを作ったり、開きをほしたりしたんですって。

11 父は、八幡太郎義家とか、源義経とか、武田信玄といった、よろいかぶとのいわゆる武者絵をかくのが上手でした。

12 「すみをたっぷりふくませた太い筆で、勢いよく、一気にかきあげる様子は、見ていて本当に気持ちよかったですよ。」

と、これは、母の思い出話です。

10 しかたがないので、



しかたない 【仕方無い】

(形)「文クしかたない・し

(1) する手段・方法がない。

「・・・い、あきらめよう」「そうするしか・・・かった」

(2) どうにもならない。困ったものだ。

「後悔しても・・・い」「・・・い奴だ」

(3) やむをえない。

「天災だから・・・い」「起ってしまったことは・・・い」「電車がでて

しまったので・・・く歩いた」

(4) たえがたい。がまんできない。

「腹が減って・・・い」「いせいでいせいで・・・い」

ひらき 【開き】

(1) 開くこと。「扉の が悪い」

(2) 花が咲くこと。「今年は花の があつこい」

(3) 二つ以上の物の差。「理想と現実との」「考え方に がある」

(4) 「開き戸」「の 駱」。

(5) 「結婚披露宴などの集まりで」「閉じる」「終える」ところのものを

忌嫌うことからの会なむをおえること。「今日はの辺でお する」

(6) 魚などの腹をさき、ほらわたをとり、開いた干物。「サメの」

(7) (野球・テニス・ゴルフなどで) 球を打つときの体の向き。「体の

が早い」

(8) 身をかわずこと。「足取、手の内四寸八寸、身の 淨瑠璃・国性

爺合戦」

・・・後略

【品詞の転成】(日本語の文法 P194)

5・1 転成とは

単語は、へつの単語になって、品詞をかえる場合がある。

ひる (動詞) ひり (名詞)

勉強 (名詞) 勉強する (動詞)

単語が品詞をかえることを品詞の転成といふ。

5・3 転成のタイプ

「特定の語形からの転成」

・名詞のハタカ格から実際 (陳述副詞)

・名詞のカラ格からひかり・ながれ (名詞)

・動詞の第一中止形からけつして (陳述副詞) ・おいて (後置詞)

書かれているなかみ (映像・感情・説明)

風好きの夫のために、魚屋の仕事を一人でやっていた母。「しかたがない」といながらも、夫の風づくりのようすを「気持ちよかった」と話していた母。なんだかんだいいながらも、夫への愛情が伝わってくる。

T だれがしたことが書いてある文ですか。

C 母です。お母さんです。

T お母さんがしたことが三つ書いてあります。

C 売ったり。作ったり。ほしたりしたんですって。

T それぞれ、何をですか。

C 魚を。さしみを。開きを。

T そう。魚を売ったり、さしみを作ったりはわかると思うけど、

開きをほすって、わかりますか。まず、開きという食べものを

知っていますか。

C 魚の腹を切り開いて、内蔵を出して、平らにして、ほしたも

の。

T どんな種類があるかな。

C あじの開き。ほっけの開き。

T なぜほすのかな。

C 魚がくさらず、日持ちがするからです。

C と同じで、なぜ「開き」といふのでしょうか。

C 魚の腹を切って開くから。

T 「開く」から、「開き」になったのですね。「開く」といふの

は、動きを表すことばで、『動詞』といいますが、これが「開

き」になるよ、もの名前で、『名詞』になります。こんなぶ

つに、動詞からできた名詞が、ほかに思いつかいませんか。た

くさば、「ひる」といふ動詞からは。

C ひり

T ほかにほっけ

C 「たたく」から「たたき」。

C 「につける」から「つけ」

T 料理の名前にもありますね。さて、お母さんは、売ったり作

ったり、ほしたりしたと書いてありますが、「たり」「が」三回も

出ているよ、どんな感じがしますか。

C たくさん仕事があるなあ。ほかにもありそう。お金のかんじょ

うをしたり、魚を仕入れたりとか。

C 魚屋の仕事を全部してたんだ。

T うん。しかも、そんな仕事を、どんなふうにしたと書いてあり

ますか。

C 一人で。

T うん。しかし、たくさんの仕事を、なぜ、一人でしたの。

C しかたがないので。

T 説明して。

C たこあげ大会が近づくと、お父さんが仕事が手につかなくな

るから、しかたなく。

T そう、お父さんの分までしなくちゃいけなかったんですね。本

当はしたくはないけど。

- ・動詞の条件形から「いわば・たとえば」(陳述副詞)
- ・動詞のつちけし形式から「つまり・ない・くだらない」(形容詞)
- ・動詞の連体形から「ある」(連体詞)・「関する」(後置詞)
- ・形容詞の第一中止形から「はやく・きれいに」(副詞)
- ・副詞から「ぶつぶん」(名詞)
- ・接続詞から「さようなら」(感動詞)

(以下略)

たり (並立助)

「完了の助動詞「たり」の終止形「たり」から。中世末期以降の語「活用語の連用形に接続する。ガ・ナ・バ・マ行五」(四) 段活用の動詞に付く場合には「だり」となる。

- (1) 並行する、あるいは継起する同類の動作や状態を並べあげるのに用いる。普通、「…たり…たり」のように、「たり」を二つ重ねて用いる(時に、末尾の「たり」のあとに「など」を添えていうこともある)。「人が出 入っ している」「本を読ん (べだり) 手紙を書い するひまもない」「大きかつ 小さかつ などして、なかなかからだに合つのがない」
- (2) (副助詞的用法) 一つの動作や状態を例としてあげ、他に同類の事柄がなおあることを暗示する。「あの子は、親にたてつい して、ほんとうに困つたものだ」「わたしが人をだまし などするものですか」
- (3) (終助詞的用法) 同じ動作を「…たり…たり」と繰り返してあげ、命令や勧誘の意を表す。

「よあ、早く起き 起き」「そこに居てはじゃまだ。どいどい」

つて

「たつ」「の転。くだけた言い方の話し言葉に用いられる」

(格助)

- (1) 動作・作用の内容を表す。と。

「きれいだ いわれて喜んで」「仲間に入れてくれ 頼まれた」

- (2) 次に来る語の説明的な内容を表す。という。

「日本 国は狭いね」「そんなしょころにある 品物じゃないよ」

(係助)

- (1) 語や文を話題として提示する。といつのは。

「鳥 飛ぶ姿がきれいだ」「いい話 何かしら」

- (2) 相手の質問・命令・希望などを受けて、それを話題として提示する。といつてせ。

「どつするか、ぼくにも名案はないよ」「早く行け、それは無理だよ」

(終助)

文末に付く。

- (1) ほかからの話を紹介する。といつことだ。

「あの人が合格したんだ」「さ」「ニュースでは雨は降らない」

- (2) 相手の言葉をとらえて、反問する。「この場合、上昇調のイントネーションを伴つ」といつのか。

「犯人がつかまつた」「結婚なさるんです、へええ」

- (3) 「だつて」の形で、けいふつ、なげやりの気持ちをこめ、引用する。

「いいかげんに早く寝なさいだ」「困つたわねえだ」

「しつわへつて」など、活用語の連用形に接続する「しつわへつて」は接続助詞「て」からできたもの。「しつわへつて」の語とは異なる

とつてで、文の最後が「したんですって」と書いてありますね。

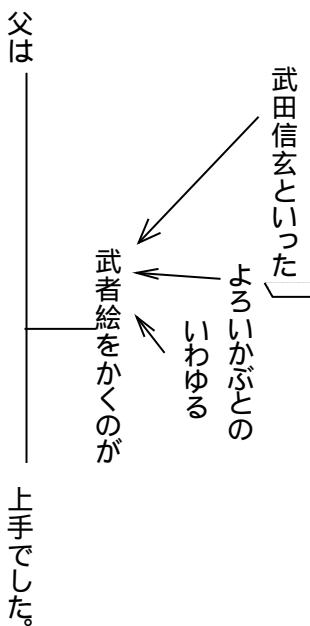
「しました」や「したんです」と比べると。

C ちよつとびっくりしてるみたい。

C え、ほんと。うそおつて感じだ。

T 何にびっくりしてるのさ。

C お父さんが、あんまり風びっくりしてはまっているよ。



とか

(並立助)

「格助詞」と「副助詞」かの付いたものから。近世江戸語以降の語「体言またはそれに準ずる語、および活用語の終止形に接続する。事物や動作・状態などを例示的に並べあげるのに用いる。」

(1) 一般には「...とか」と「...とか」というふうに、列挙するものの末尾の事項にまで「とか」を付ける。
「毎日、掃除 洗濯 食事の支度」に追われ、ゆっくり本を読む暇もない。「そんなに勉強ばかりしていないで、時々散歩する 運動する した方がいいよ」

(2) 時には「...とか...とか」というふうに、末尾の事項に「とか」を付けないこともある。

「この夏休みには、洞爺湖 支笏湖 阿寒湖など、いろいろな湖を周遊してきた」「わざわざおいでいただかなくても、電話を下さる手紙でお知らせする」として結構です」

「ノ格」ノ格は、基本的な連体格で、その用法は広い範囲におよぶ。
よこぬ。

かざられる名詞に關係するものをあらわす。

かざられる名詞のあらわすものの属性をあらわす。
もともとは、かざられる名詞に關係するものをあらわしながら、属性をあらわすほうへ転じてくるもの。

かざられる名詞のあらわすものの場所、時間、目的などの状況をあらわす。

かわらわらぬ名詞のあらわすことばや作品の思い・考えをあらわす。

(日本語の文法 P46 参照)

「動名詞」「動詞で終わる主語句、主語節、補語節のなかで、動詞は連体形のあとに「の」「終止形のあとに「が」のついたかたちであらわれる。このかたちは、しるべに対しては、名詞の連用格を支配したり、副詞などの修飾語をつけたりして、動詞としてはたらくが、それ自身は、曲用して、しるべに対して、名詞としてはたらく。これを動名詞と呼ぶ。」

・あなたがいらっしゃるのを、ずっとまっぴらいたのですよ。な、あ、はやく、おあがりくださいな。

・そのためには、これをいじめるに、しめげるかを、きめなければならぬ。うい、うい、するから、そのあつ、きめたいな。

・正面に、みっく、みっく、なな、なな、の、が、ママ、ママ、その、みぎの、あたまが、ほつ、かすんで、いるのが、ホウタ

T ちよつとや、いい文ですね。最後の方から読んでいきましよう。上手でしたと書いてありますが、上手だったのは、だれですか。

C お父さん。

T この文の骨組みは、お父さんは上手でした、となりますね。何が上手だったのですか。

C 武者絵をかくのが。

T かくのが、の「の」を、ほかのことばに言いかえると。

C かくことが。

T では、武者絵を知っていますか。うちにありますか。・・・わかりませんね。先生が持ってきてみました。どうですか。

C 強そう。いさましい。

T 武者絵の「武者」を辞書で引いてみましょう。

C 武士。昔の兵士。(例)武者人形。影武者。武者震い。

T いさましいはですね。だれの武者絵ですか。

C 八幡太郎義家とか、源義経とか、武田信玄といった。

T この三人のうち、知っている人、いる？・・・武田信玄なら知ってるかな。義家と義経は、今から八百年ほど前、信玄は、五百年ほど前に活躍した人です。「とか」でならべてあるから。

C ほかにもいたのかもしれない。

T なきほどの「たり」と同じような使い方ですね。

T ところで、「よろいかぶとの」と書いてありますが、「の」の意味は？

C よろいかぶとを着た、身につけた。

T よろいかぶとは、わかりますね。よろいは？

C 刀で切られないようにするための、ぶあつい服。

T かぶとは？

C ヘルメットみたいなもの。

T 折り紙の折り方にある。

T よろいかぶとは、むかしのたたかいの「二ノフォームみたいなものですね。」

C 「いわゆる」の意味は？辞書で引いてみましょう。

C 世の中であいわれてくる。

T 難しいですね。「ぶつう、みんなが武者絵をよんでいる」としておきましよう。お父さんは、武者絵をかくのが上手でしたと

ありますが、また、「の」が出てきました。

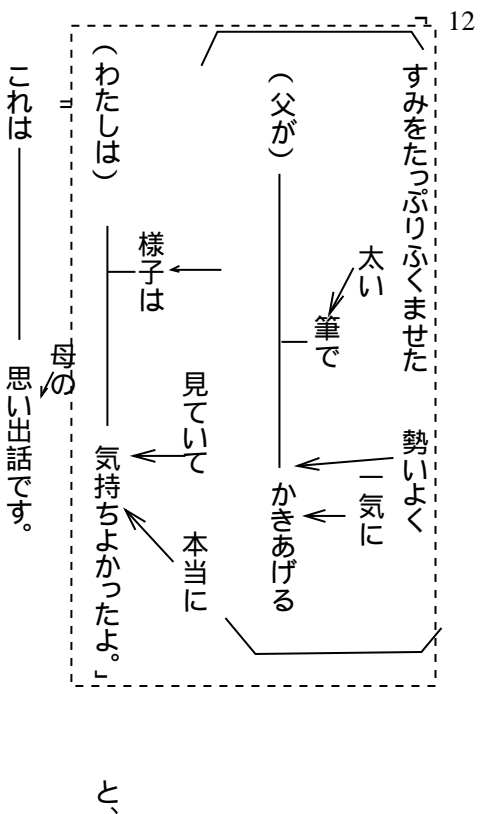
C かくことが、の意味です。

T そつですね。

いわゆるいは【所謂】

(連体)

「言ふ」に上代の受け身の助動詞「ゆ」の連体形が付いた語「世にいわれている。よくいつ。いついづかの。」「天才とはまた違う」



ふく・む【含む】

- (動マ五「四」)
- (1)中に包みこんでもつ。「水を口に・む」「花粉齧の気を・み/平家³」
- (2)ある物がその成分・要素としてもつ。含有する。「金を・む鉱石」「税・サービズ料を・んだ料金」「とげを・んだ言葉」
- (3)心の中に「めてもつ」。「憤りヲ・ム日葡」「勅命を・んで類に征罰を企つ/平家⁷」
- (4)事情を理解して考慮に入れる。「この点を・んで方針を立ててほこ」
- (5)ある感情を表情などに表す。「愁いを・んだまなこ」
- (6)ふくらむ。「指貫の裾の方、少し・みて源氏(若菜上)」
- 「含める」に対する自動詞
- 「可能」ふくめる

あ・げる 〇【上げる揚げる挙げる】

- (動ガ下「下」文ガ下「あ・べ」)
- (23)動詞の連用形に付いて、最後までそれを成し遂げる意を表す。し終える。《上》

「論文を書き・上げる」「一週間でメンバーを編み・げる」

- T 長い文なので、分けて読んでいきましよう。まず、かきかっに入っていない部分を読んでみましよう。
- C と、これは、母の思い出話です。
- T お母さんの思い出話を書いてあるんですね。念のため、聞いておきますが、お母さんが思い出している話なの？ お母さんをお思い出している話なの？
- C お母さんが思い出している。
- T だれを？
- C お父さんを。
- T お父さんのことを思い出しているんですね。さて、そのなかみを見てみましよう。かきかっの中です。読んで。
- C (読む)
- T 述語、つまり、どつだったにあたる部分は？
- C 気持ちよかったです。
- T では、気持ちよかったと感じたのは、だれでしょう。
- C わたしは、わたしたちは。
- T わたしっ？
- C お母さんのこと。
- T そう。文には書いてないけど、お母さん(たち)は、気持ちよかったんですね。何が気持ちよかったの？
- C ようす。かき上げるようす。一気にかき上げるようす。
- T そう。ただの「かきます」「ひなへて」「一気に」「かきあげる」と書いてあります。比べてみると、どんなようすが目につかぶかな？
- C 止まらずに、最後まで書いています。ボードでか。
- C 休まず、あつといつ間にかいてしま。
- T そうですね。そんなようすを、さうにくわしくしているとはもありませ。
- C 勢いよく。
- T だれが何をかいているようすでしたっ。
- C お父さんが、よろいかぶとの武者絵をかきようす。
- T そうですね。何を使って書いています？
- C 太い筆。
- C すみをたっぷりふくませた太い筆。
- T 見たこと、あるかな？
- C テレビで、でっかい紙に習字しているのを見たことがある。
- T そうかあ。こゝでは、何をかいているの。
- C 絵。武者絵。
- T 字ではなく、絵をかいているんだね。しかも、細書きではなくて、太くて、すみがいっぱいついた筆で。しかも、かなりのスピードで。お父さんのどんなようすがわかるかな。
- C すごくかきなれている感じ。
- C 頭の中に絵が入っていて、すらすらとかいている。

C 細かいことをいちやいちやかくのではなく、まずはつかいてい
る。

T うん。そんなよつすを見たお母さんは、どう感じたんだろう。

C 見ていて、本当に気持ちよかった。

T うん。そんな思い出が心に残っているんですね。

(小さな総合)

T とととで、お母さんのこの言い方から考えると、お母さんの気
持ちは、どうなんだしょっつとどんな言い方だったと思っっ？

C うれしそっ。

お父さんのことを自慢している感じ。

T そうだね。怒っている感じではないね。でも、その前の文はど
うだった？

C しかたなく、一人でいろんな仕事をしていた。

T じゃあ、お母さんが一人で仕事をしている時って、腹を立て
ながらやってたんだろうか？

C 腹が立つけど、しかたないなあと思っている。

C 風を作っているお父さんが好きだったんじゃない？

C いやだとは思ってない。

(お母さんの気持ちを、いろいろ考えさせる。お母さんの、

お父さんに対する愛情が感じられたらいいのだが)